

北上して南西諸島は 500mb まで十分湿っているから、寒気が南下して温度傾度が増大し、南西諸島方面の南西風が強まると上空の空気は北上して、西日本に過飽和域を形成するのである。

以上の事実は第Ⅱ報第3図 b, c にも現れていて、700mb ではかなり乾燥しているのに 500mb では過飽和になっているのが各所にみられるし、また我々が日常使用している断熱図にもしばしばみられることである。

下層の飽和もこれと同様で、寒気の南下するにつれて南ないし南西風が強まって気層を北上させ、ついに気層全体が飽和になるのである。第4図に鹿児島島の 700mb の露点と風、および名瀬の 850mb, 700mb の露点の変化を示す。これによると南風のとき、しかも30ノットをこえる場合に鹿児島島の 700mb の露点は名瀬の 700mb

の露点より高くなっているのがよく現れている。これは 700mb より下層の空気が北上するにつれて上昇したことを物語っている。

4. むすび

以上のことから、

1. 満州方面にある寒気の南下に伴なって西日本や南西諸島方面では温度傾度が増大し南又は南西風が強まる。

2. 南風は緯度効果だけで上昇成分をもっているのだから北上するにつれて気層は下層まで飽和になり；氷点下では過飽和になる。この現象は気流系に収束がある場合にはさらに増強される。

ということができる。

551. 509. 323: 551. 509. 33

選別法による 1963 年夏の気温予想

荒 川 秀 俊*

筆者はここ二年前から、仙台及び札幌管区气象台と協力して、選別法による夏の気温長期予想を実施しつつある。1962年11月までの資料を用いて、1963年夏の東北地方の平均気温は次の如くに予想された。

年 月	予 想 値	1947~1962 年に比して	30 年 平 均 比 に して
1963年 6 月	16.3°C	-1.3°C	-1.5°C
年 7 月	22.3°C	-0.1°C	+0.3°C
年 8 月	25.1°C	+1.3°C	+1.4°C

また1964年1月までの資料を用いて、1963年夏の北海道の平均気温は次の如くに予想された。

	年 月	予 想 値	1947~1962 年に比して
札 幌	1963年 6 月	16.6°C	(+1.0°C)
	年 7 月	20.7°C	(+0.3°C)
	年 8 月	20.5°C	(-1.3°C)
北 海 道	1963年 6 月	14.6°C	(+1.0°C)
	年 7 月	18.7°C	(+0.3°C)
	年 8 月	19.7°C	(-0.6°C)

これらの結果は昭和38年2月に開催された長期予報検討会で発表された。

* Hidetoshi Arakawa 気象研究所
—1963年6月17日受理—

関西支部だより

支部役員の一部更新

3月から4月にかけて会員の大巾な移動があり支部役員も一部交替した。新しいメンバーは下記の通りとなった。

支 部 長: 藤井 義之

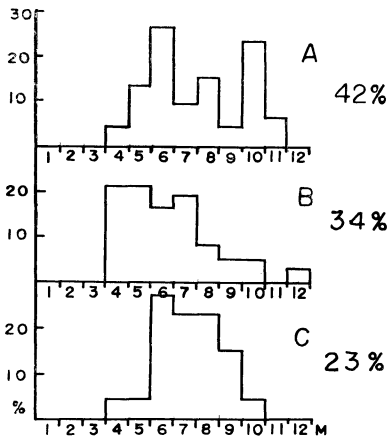
常任理事: 中島暢太郎, 大西 慶一, 股野 宏志,

明戸 謙, 喜多村一男

理 事: 西本 清吉 (近畿), 来海 徹一, (中国),
檀上 哲郎 (中国), 箱田 顕雄, (四国),
菊田 一郎 (四国)

1963年7月

(241頁につづく)



第8図 A, B, C型の頻度分布

短時間の背の高い降雨塊で、継続時間は2～5分である。雷雨の場合もほぼ同様な変化を示すようであるが、この期間には観測例がなかった。

以上が現在までに得られた資料によって、その変化型を分類した結果である。その月別頻度分布を第8図に示す。

4 むすび

雨量強度の変化を示す自記装置を試作して観測を行なったが、この装置は短時間の雨量強度が記録され、簡単な機構の為め長期間の使用にも耐え、観測に便利である。

一点の観測結果より強度変化型の分類を行ない、降水雲の特徴が推察出来る資料が得られたが、更に検討を進めたい。

又、降雪の強度変化もこの装置に適当なヒーターを取付けることによって観測することができる。

終りに協力していただいた北川寿江嬢に深く感謝する。

前の変化とはほぼ同様な変化を示している。1962年8月19日は、台風12号の前面に生じた前線からのしゅう雨で、

昭和38年度関西支部年会記事

(223頁よりつづく)

昭和38年度の関西支部年会は去る5月27・28の両日、神戸市生田区の兵庫県中小企業労使センターで開催され、下記の48論文が発表された。出席者は約150名。

記

1. うねりの予想法について
神戸海洋気象台 橋本 正義
2. 簡単なうねりの予想図(第2報)
神戸海洋気象台 明戸 謙
3. 海上における気温の垂直分布について(第2報)
神戸海洋気象台 三宅 昇
4. 愛媛県沿岸に於ける霧及び濃霧について
松山地方気象台 大成 公道
5. 蒸発計の試作試験について
広島地方気象台 木戸岩之助
6. 近地震の研究(追報)
大阪管区気象台 中村 春男
7. 地震記象の初動(立ち上り)及び関連問題について
剣山測候所 岡野 敏雄
8. 海上風の特性
神戸海洋気象台 川鍋 安次
9. 海面天気図から海上風を算定するBijvoetの方法の本邦付近への適用
神戸商船大学 三木 楯彦
10. 明石海峡における風のメソ解析
神戸海洋気象台 堀内 俊彦

11. びわ湖周辺風の風について(第1報)
彦根地方気象台 児玉 良三
12. 台風と大阪の風の特性
大阪管区気象台 成川 二郎
13. 台風経路と京都府南部の風
京都地方気象台 柳本 三治
14. 寒気と台風(I)
神戸海洋気象台 平沢 健造
15. 冬の日本海低気圧の発達
神戸海洋気象台 明戸 謙
16. 低気圧の発達と移動の量的予想について(第1・2報)
神戸海洋気象台 金谷 光三
橋本 正義
17. 昭和37年12月5～6日の強風について
舞鶴海洋気象台 坂根 教闊
18. 鞍部状気圧配置における前線の発達と衰弱
浜田測候所 岸田 和博
19. 偏西風波の発達衰弱の予報
大阪管区気象台 藤範 晃雄
20. 擾乱の移動速度および発達速度について
大阪管区気象台 山本 主夫
21. 亜熱帯ジェット流の唐突な変位(Js-impulse) II
寝屋川高校 藤井 盛澄

(243頁へつづく)

- 注: 1. 国名はアルファベット順に並べてある。
 2. ルーチンの欄に○印をつけたものは数値予報をルーチンに行なっていることを示す。○をつけたものの中に週末だけ計算を行なっていないものもある。
 3. 計算に用いるモデルをごく簡単に示した。
 4. 格子の間隔とその数
 5. 計算機で解析を行なっている場合には○印をつけ、そうでないものには×印をつけた
 6. 用いている計算機の名称。() 中は製造国名。
 (2)ソ連の計算機については WMO への報告に記載されていなかったため、つぎの文献に記載されているものを書いておいた。
 伊藤宏, 磯野良徳 (1960): ソ連の数値予報, 気研ノート, 11巻, 4号
 7. 数値予報の計算結果が放送されている合には○印をつけた。
 8. (1)中華人民共和国の欄は中国気象学報 (1962) による。

(241頁よりつづく)

- | | |
|---|---|
| 22. 準地衡風近似とエネルギーの保存について
大阪管区気象台 原田 朗 | 小野 俊行 |
| 23. 地上天気図分類の試みと実例
鳥取地方気象台 増井 初水 | 40. レーダーにおける異常伝播とその応用 (その1)
室戸岬測候所 井上 基 |
| 24. 兵庫県北部の天気予報について (第1報)
豊岡測候所 和田 徳弘 | 41. 室戸岬レーダーのエコー (I)
室戸岬測候所 門脇俊一郎
栗林 逸夫 |
| 25. 太平洋高気圧の盛衰予想と予報への導入について
松山地方気象台 鈴木 斉 | 42. 垂直ビームレーダーにより観測された Snow Trails
から風速分布を推算する方法について
京都大学防災研究所 光田 寧
京都大学理学部 石嶺 剛
宮田 賢二 |
| 26. 成層圏における等圧面高度の昼夜の差の変動について (第2報)
潮岬測候所 吉良 清 | 43. 阪神地方における大気汚染飛行機観測 (第2報)
大阪管区気象台 中野 道雄
後藤 昌弘
気象研究所 伊東 疆自
森口 実
山路 勳 |
| 27. 梅雨明け後の悪天候について
彦根地方気象台 田中 勝
伊藤 正幸 | 44. 冬型パターンに於ける岩国および板村空港のシーリングと降水について 岩国航空測候所 江尻 勳 |
| 28. 西日本6月雨量と広域パターンの特徴について
高松地方気象台 塩田 輝也 | 45. けい留気球による微細気象観測 (I) 観測方法に対する検討
京都大学理学部 佐橋 謙
水間 満郎
花房 竜男 |
| 29. 10日平均 500mb 図による中国地方の天気予報
広島地方気象台 今田 克 | 46. けい留気球による微細気象観測 (II) 広い平坦地上での観測結果とその解析
京都大学理学部 佐橋 謙
花房 竜男 |
| 30. 上層強風帯からみた夏について
岡山地方気象台 福原 賢治 | 47. けい留気球による微細気象観測 (III) 自由対流に関する観測結果とその解析
京都大学理学部 水間 満郎 |
| 31. 下部成層圏より見た北半球中緯度循環と気候
広島地方気象台 根山 芳晴 | 48. けい留気球による微細気象観測 (IV) 谷間の夜間下降風の観測結果とその解析
京都大学理学部 佐橋 謙 |
| 32. 島根県における大雨分布の特徴について
松江地方気象台 来海 徹一 | |
| 33. 六甲山系周辺から淡路島に達する地域における大雨の雨量分布について
神戸海洋気象台 広瀬 勉也 | |
| 34. 下層ジェット流の解析 (中間報告)
大阪管区気象台 後町 幸雄 | |
| 35. 四国電源地帯の週間雨量予想
高松地方気象台 菊田 一郎 | |
| 36. 紀の川流域の降雨特性と下流水位の関係
和歌山地方気象台 松尾喜代子 | |
| 37. 中国地方の雷雨予報
広島地方気象台 定成 勇 | |
| 38. 奈良県の雷について
奈良地方気象台 西村 浩三 | |
| 39. 雷雲の移動について
大阪管区気象台 角浦 睦久
山岸米二郎 | |